

第五号の33から55までをまとめてみたい。

「親神がこの世界を創めて以来どれだけの想いを尽くしてきたか、人間には分かり難いだろう。しかし、そうは言っても教えなければ誰も知りえないのであり、これから順々と言い聞かせるから、心を静めて聞いてほしい(33～35)。

これまでも人間には、法術として、神が人間に力を貸すための様々な祈りの作法を教えてきた。しかし、その結果として得られる神業は、すべてこの世を創めた親神がしてきたことであり、法術などというものは枝先であって、根元に親神の働きがなければ簡単に折れてしまう。つまり、法術といってもそれ自体に力があるのではなく、それをを用いる者の心に依じて、親神が不思議な働きを現してきたのだ。人間は浅はかであるから、物珍しいことを見聞きするとすぐに法術などといって心奪われてしまう(36～45)。

親神はそうにして今までもその働きを現してはきたが、その本心を知った者がいない。そこで、これからは親神のこの思いが分かるように、まず、世界中の人間の心を澄み切らせていく。どうするかといえば、人間の心のあり方に依じて、神の働きを返していくのである。たとえ道のりが千里隔たったところにいる者でも、その心を受け取り次第に直ぐに返す。そして、それは善悪共にすべて返していくことでもある。つまり、人間が良いことを言葉にしても、あるいは心の中で悪いことを思っても、それ相応に直ぐに返す。この道理さえはっきりと分かってくれば、どんな者でもおのずと心が澄み渡っていくであろう(46～55)。」

「おふでさき」を読むとき、私たちはいろんなことを考えている。たとえば、言葉の意味を理解しようとする。頭のなかで「なるほど」と納得することもある。ものの見方が変わったりもする。他方で、よく分からずに読むだけに終わる場合もある。内容はよく分かるが、腑に落ちないこともある。繰り返し読みつつも、文字をなぞっているだけのこともある。

自分の思考の中で、ある複雑な事柄が、一つのキーワードによって整理される経験は誰しもするだろう。そのような整理の仕方は物事の“概念”による把握だといえる。それは自分の考えや理解が明瞭になるという点で有効である一方、そのプロセスにおいて多くのことを捨象してもいる。辞書的には、概念とは「複数の事物や事象から共通の特徴を取り出し、それらを包括的・概念的に捉える思考の構成単位」を意味し、西欧語では「一つにして掴まれたもの(conceptum)」や「掴まえる(begräfen)」を語源として主に論理学や哲学の分野で醸成されてきた。したがって、概念による把握は、物事の理解に首尾一貫性をもとめる私たちの心性に従っているといえよう。そして、「おふでさき」を読む上でも、私たちはときに概念を持ち出して、そこに記されている内容を一貫的に把握しようと努める。

さて、今回でいえば、46から55に記されている「人間の心のあり方に依じて守護を返す」という親神の働きは、深谷忠政なら「呼応の神」という概念で捉えるだろう。それは「親神が人間の心を台として働かれるということ、逆にいえば、人間の

心の理を通して親神の理を見るということ、ここに本教の実践教理が成立する」と述べ、さらに、「神人の協働は、親神の力七分、人間の力三分、それが合して十分、すなわち全くものとなるのである。ここに神人和楽の陽気ぐらしがある」と説明している。

このような説明を受けて、「呼応の神」という概念が自分の思考のなかで整合的に位置づけられると、「おふでさき」のこの箇所は「呼応の神」について記されているのだと一応は理解される。しかし、それだけではまだ最初の階段を上ったにすぎない。次には、実際に「呼応の神」が自分の生活のうえで感得されなければならない。深谷もその点に注意して「実践教理」という言葉を使っている。つまり、深谷にとっての「呼応の神」は思考上の概念に留まらず、捉えどころのない実生活に通底しているのである。

ところで、このような実践教理のあり方こそが、実はここでいう「呼応の神」の内実といえよう。つまり、神はこの世界を説明するうえで概念として捉えられるだけでなく、それがたとえ不整合・不可解な仕方であっても私たちの実生活に直に関わっているものであり、言い換えれば、「呼応の神」は概念としての有効性を持ちつつも、私たちの心のあり方に実際に「呼応している」のだ。それは概念であると同時に実生活に現れる“神秘”である。

ところが、必ずしも神秘がそのまま人間の心のあり方に呼応する親神の働きとして受け取られるわけではない。私たちは、人間の力を超えたものを目の当たりにしたとき、実際には様々な反応する。それが36～45のテーマである。親神が顕現した立教以前でも、世界は親神によって守護されており、親神はさまざまな仕方で不思議な働きを現してきた。ところが、親神をいまだ知らない人間はそれを法術といった人間の祈りの力として捉えてきた。つまり、これまでも神秘はあるにはあったのだが、それは「呼応の神」としてのあり方ではなかったのである。したがって、親神の神意をたずねる上では、実生活において神秘を体験するだけでも十分ではなく、神秘がどのような道理で神秘なのかを知らなければならない。ここに先に神のあり方を「呼応の神」として概念的に捉えた意義が見出せる。これが「実践教理」の「教理」の部分である。

要するに、親神は物事の道理や善悪の基準を示すことによって、人間の力では及ばない神の御業を人間の責任において現そうとされているといえる。つまり、親神と人間が呼応した成果は人間にとっては神秘であるが、そのような神秘を受けるための心の受け皿は道理によって作られなければならないのだ。したがって、これまでの法術は、人間に受け皿がなくとも現してきた天の余徳だといえよう。しかし、天の理を教えられている私たちは、親神と呼応しながら大人の階段を上らなければならない。子が成長するにつれて親の思いを知るように、私たちは何のための神秘なのか、何のための道理なのかを知らなければならない。

それでは、その神意とは結局何なのか。それがさらに直前の33から35に述べられている。つまり、親神は、「親神がこの世界を創めて以来どれだけの想いを尽くしてきたか」、その親心を伝えたいのである。